



## 豊かな新潟へ、再び。

新潟県立大学現代行政研究室 田口 一博

この4月、新潟県立大学に来てから県内めぐりをしています。平成の合併の結果、30になった市町村を毎週1カ所ずつまわっています。市町村めぐりといっても、役所の訪問、ではありません。もちろん、議会や役所にも寄りますが、なによりものノルマは、そのまちに1泊はして、食べるもの、飲むもの、また、まちの噂なども聞いています。

これまで、スキー場には何回も来ていましたが、新潟の「まち」を目的として来たことは3回しかありませんでした。先入観として持っていた新潟の正直な印象は「取り付きにくいなあ」です。1センチの雪が積もると大混乱するあつけらんとした気候に育った神奈川県人としては、北越雪譜の世界はもとより理解不能。片側3車線ある新新バイパスを3車線とも同じ速度で走っているのをみると、第三京浜（80キロ制限ですが、ほとんど誰も守ってはいません）ならパッシングされるか内側

から抜かれるよな、と思ったりします。2か月たった現在、新潟にはあらゆる点で走行車線と追越し車線の区別がないのだ、ということによりやく気がついたところです。

狭く、何の資源もない神奈川県人には、そこで新潟の底知れぬ豊かさに驚きます。何もあくせくして人を出し抜く必要はない。そうしなければ生きていけない世界に育った身としては、なんでそんなに汲々としているのと、さめた目で見られると、これまで何をしていたのかと思います。新幹線の名前と停車駅が一致していないことに焦る。速いか遅いかが価値なのではなく、どこまで行くのかが大事だ、ということに新潟の持っている価値観を知ります。谷川岳で止まれば「たにがわ」で、朱鷺が住んでいるところまでくるのは「とき」だ、というのは正しい。東京・博多間のどこにも「のぞみ」はないではありませんか。

とはいえ、何を言ってもあくせくなどはし

ない学生たちに戸惑いつつ、何でそんなに急がなければならないのかを反省します。裏の畑で野菜が採れて、週末に田んぼの手入れをすれば食べるのには困らない。代々の家に住んで住宅ローンなどはない。県庁や市役所に自転車置き場がある。神奈川県庁には自転車置き場はないし、職員寮は片道1時間にある。満員電車が2分おきに走るのが豊かか、昼休みは自転車で自宅に帰って食べるのが豊かか。かなり基本的なところで間違っている世界に生きてきたことを思い知らされるのが、新潟の豊かさなのです。

これからどんどんと縮んでいく日本。世界中からお金の力でモノを集めるというシステムは、もう保たないでしょう。そのとき、生きていけるのはどんな社会か。一心不乱に坂の上の雲を追いかけてようやくそこに着いたら雲と思っていたものは霧。お腹がいっぱい



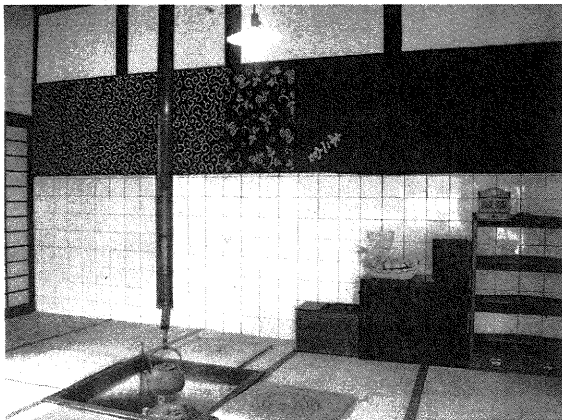
阿賀町古澤屋の朝食  
炭に至るまで地産地消。新鮮なものをふんだんに。  
何よりもの贅沢ではありませんか。

になるのは、坂の下の田んぼに育つお米なのです。

1887（明治20）年にまとめられた全国の人口集計では、新潟県の人口は大阪府を抑えて第一位。当時、福島県にあった東蒲原郡を足すと162万2,536人。2010年5月の推計では238万5,896人と、いまの新潟市全体にあたる76万3,360人増えています。ところが人口を長期的に見ると、県の合計では1995年国勢調査での248万8,364人がピークで、これから25年間で180万人余りへと減少することが見込まれています。さらに個別市町村ごとに見ると、1920年の第1回国勢調査よりも現人口の方が多いのは18市町に留まり、この90年間で新潟での人々の住まい方は大きく様変わりしていることがわかります。伸びることも、縮むことも知っているのが新潟なのです。

これからの新潟の豊かさは、通勤しなくても生活できるところにまずあります。新潟各地に残る豪商・豪農の館を見て思うのは、オカミに頼らない民の底力。農地解放で多くの伝統が断ち切られてしまっていますが、新潟は殿様がではなく、人々が切り開いてきたまちであったことがまさに「自治」の問題として想起されるべきでしょう。砂丘に閉じ込められた信濃川・阿賀野川を鎮め、豊かな水田としたのは多くが民の篤志の力だったではありませんか。

すると、神奈川県人から新潟への願いは21世紀の日本で持続させることができる、ラ



聖籠町二宮邸いろり部屋  
明治期のこの大きさのタイル張りは大変な技術を要する贅沢。その何気なささが洒脱です。

イフ・スタイルの「見える」化です。いま、消費税増税の話が出ています。しかし自給自足や物物交換であれば、消費税もかかりません。そもそもお金だけで計る所得という概念だって怪しいもの。両手で吊革を握っていないと痴漢に間違えられる満員電車で座りたければ、運賃とほぼ同額のグリーン料金を払う。でも座れないこともあるとか、冷えた井戸の水を飲める人にとって、輸入されたペットボトルの水を段ボール箱で買って車で運ぶのが週末の仕事、とか、というのはにわかには信じられない「豊かな」所得の使い途でしょう。一極集中している首都圏での生活は確かに便利なこともあります、とても豊かであるとは言えませんし、持続可能どころか世界中からお金にまかせて様々なものを買集めていなければ、一刻たりとも存続できないものなのです。輸入化石燃料に極度に依存する生活か

ら、いくらでも再生できる薪や炭の生活を、というのが最右翼かもしれませんが、通勤電車1時間と、朝の畑の手入れ1時間のどちらが豊かか、スーパーでしなびた野菜を買うことと庭で育った野菜を食べるのとでどちらが豊かか、そして生涯賃金の半分近くが住宅ローンで消えるのと百年でも二百年でも住み続けられる代々の家に住むのとどちらが豊かでしょうか。

他方、もうひとつは人口減少と高齢化、それに合併は何を起こすか、ということです。かつて、日本の都市部でもかつての中心部が空洞化する「インナーシティ」（スラムの代替語）が問題となりました。バブル期の地上げにより解消したところもありますが、今も残るところも多数あります。バブルが去って地価が下落すると、地上げにより土地を高度に利用しようという圧力がかかからなくなりますから、あとはそのまま。また、郊外部の大規模な開発でも、同じような問題が起きています。そこでこれから全国に広がる、地域の「縮み方」の先達としての経験も貴重です。明治維新以来、フローの豊かさだけで走ってきた日本に、地域に根付いて生きるストックの豊かさを教え、変わらないことの大切さを目で見るように示していくこと。おそらく、それがこれからの日本に対する、新潟の使命、ではないでしょうか。

（たぐち かずひろ）